

文・写真

鈴木 すずき

紀 もと

# ミュージアムの中の 古代アメリカ文明

アメリカ合衆国のサンディエゴ市内の太平洋を見下ろす丘の上にあるバルボア公園は、パナマ運河の開通を記念して1915年にパナマ=カリフォルニア博覧会が開催された場所である。2015年11月、私はこの公園の中のサンディエゴ人間博物館を訪れた。常設展「マヤ：空の心、地の心」の展示手法を学ぶためだ。主な展示物は、グアテマラのキリグア遺跡の石碑と石像である。博覧会のために現地で型取りされ、制作されたレプリカだ。展示場が閉鎖されていた第2次世界大戦中を除き、1世紀間に渡ってここに陳列されているという。そしてその周囲には、ガラスケースの中に土器や石器などが収められ、キリグア遺跡の特徴とマヤ文明の概要が説明されている。展示物はすべて先スペイン時代のものだが、1つだけ例外があった。1957年にメキシコで収集されたラカンドンの弓矢である。



サンディエゴ人間博物館の「マヤ：空の心、地の心」展示（2015年11月、サンディエゴ市、アメリカ合衆国）。

なぜここにマヤ系先住民族の20世紀の資料が展示されているのだろうか。その存在によってマヤ文明のどのような性質が示唆されているのだろうか。これらの問いは現在の私の研究にとってきわめて重要なものである。



「古代から現代へ」と題したロサンゼルス郡美術館のラテンアメリカ展示場(2014年11月、ロサンゼルス市、アメリカ合衆国)。

### 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」

本稿では、アメリカ大陸の古代文明に関するミュージアム展示の比較研究の概要を述べる。この研究は科研の新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」(2014-18年度)の一環として実施している。

新学術領域研究の目的は、文字通り新しい研究領域を開拓することにある。そのために奨励されているのは学際的なアプローチである。「古代アメリカの比較文明論」は、マヤ考古学を専門とする青山和夫(茨城大学)を代表とし、4つの計画研究から構成されている。計画研究A01は湖沼堆積物や樹木年輪から環境史の復元に取り組む自然科学的研究である。A02とA03はそれぞれメソアメリカとアンデスを対象とする考古学的研究だ。そしてA04は、古代アメリカ文明を後世の人びとの視点から振り返る歴史学・文化人類学的研究である。

本プロジェクトが「比較文明論」と名乗るのは、少なくとも3種の比較が可能になるからである。第1に文明の動態に関するメソアメリカとアンデスの地域間比較、第2に自然科学データと考古学データの比較、およびそれによる文明の動態への環境要因の検討、第3に主に物証から推論される考古学的な古代文明像と、主に記録、記憶された言葉から解釈される歴史学・文化人類学的な古代文明像の比較である。これらの比較によって、考古学による文明研究を他の方法によって相対化し、新たな古代アメリカ文明の研究方法を提案することを目指している。

私が代表を務める計画研究A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」の目的は、植民地時代以降、中南米の先住民文化が表象される際に古代アメリカ文

明がどのように資源化されているかを問うものである。資源化とは「資源人類学」(内堀編2007)から着想した概念であるが、私たちは「文明の資源化」を、文明に関する事物が何らかの目的のために利用されることと平易に定義している(鈴木2015)。中南米諸

国では、古代文明に関するイメージや情報を国家の文化的自画像として政治資源化したり、観光振興のための商品として経済資源化したりしてきた。また先住民族の人びとが、アイデンティティの拠り所として先スペイン時代の過去を文化資源化する動きも活発である。このため私たちは、植民地時代から現代に至るまで、中南米の人びとにとって古代文明はさまざまな課題解決のための資源の宝庫であるという仮説を立てた。2人の歴史学者と7人の文化人類学者がチームを組み、誰が、いかなる関心から、古代文明のどのような特徴に着目して資源化を試みているかについて研究を行っている。

### ミュージアム展示の比較研究

古代文明の資源化は政治、経済、文化などさまざまな関心から行われているが、ミュージアムの展示はそれらの資源化活動を促す情報源であり、同時に資源化の成果が表現される場でもある。この意味で、私はミュージアムが他のさまざまな資源化の試みの結節点になると考え、古代アメリカ文明展示の比較研究を志した。

近年のミュージアムに関する文化人類学的研究では、展示が構築されるプロセスや、展示される文化の担い手であるソースコミュニティがそのプロセスにどのように関わるかという問題が関心を集めている。こうした研究は、ミュージアムにおける知識生成のメカニズムを解明する点できわめて重要である。反面、いわば展示場のバックステージで「いかに展示すべきか」に議論を集中させており、展示場において「何を展示すべきか」という関心は後退している感がある。私は、



ミュージアムが古代アメリカ文明をどう表象するかという点に関心があり、あらためて展示そのものを注視する必要を感じている。

異文化を扱うミュージアムの展示について研究するにあたり、前提となるのは、展示は異文化表象の一形態であるという考え方である。Sturge (2007) は、他者を表象するという点から、文書の翻訳、民族誌の記述、民族学ミュージアムの展示を比較し、いずれの場合も表象する者とされる者の力関係を媒介に表象が成立することを確認している。この議論に従えば、ミュージアムの展示を異文化に関する客観的な表現とみなすことは到底できない。必要なのは展示を多様な要素から構成されたテキストとみなし、そこに込められた意味を解釈することである (Mason 2011)。

その解釈についても、さまざまな方法が提案されているが、私がつとも基本と考えるのは、Lidchi (1997) が “The Poetics and the Politics of Exhibiting Other Cultures” と題する論文で提唱した展示の「詩学」と「政治学」の両面を意識することである。前者は、展示物とラベルやパネルの表現の関係性、および展示場の構成などから展示の意味を読み解くことであり、後者は、展示制作にあたってどのような権力と知識の関係性が存在するかを問い、ミュージアムが社会に対して発する政治性を検討することである。以下ではこの2つの方法に従い、これまでの私の研究成果を整理してみたい。

### マヤ文明展示の多様性

古代アメリカ文明とは通常、メソアメリカ地域とアンデス地域に発達した先スペイン時代の諸文明を意味する。ここではその中のマヤ文明に限定して議論を進

めたい。マヤ文明とは、周知のごとく、紀元前10世紀頃から現在のメキシコ南部から中米地域にかけて栄えた文明であり、メソアメリカの主要な文明の1つである。私はこれまでマヤ文明を展示する17のミュージアムを訪問した。

これらの比較のため、1) 現代(20世紀以降)のマヤ民族の文化が展示されているか、2) マヤ文明の継承者に関する説明があるか、3) 2) で説明がある場合、その継承者がマヤ文化に対して取る態度をどう説明しているか、の3点に着目した。各ミュージアムの展示はそれぞれに個性的だが、その間に存在する何らかの傾向を見出すために1) と2) の基準を組み合わせて4群に分類してみた(表参照)。

第1群は、現代のマヤ民族の展示も、文明の継承者に関する説明もなく、たんに古代文明としてのマヤを見せるだけの展示である。アメリカ合衆国のアメリカ自然史博物館とメトロポリタン美術館、メキシコのカンクン・マヤ博物館がこれに該当する。

アメリカ自然史博物館のマヤ展示は、メキシコ・中米室の最奥にあり、土器、石器、翡翠の装飾品、ピラミッドの模型、石碑のレプリカなどが展示されている。解説パネルでは、マヤ文明を「先コロンブス時代の新世界において最高の文化的発展をみた文明」と紹介し、その理由として道具製作や建築などの技術水準の高さと、マヤ文字や天文学などの知的洗練をあげている。一方メトロポリタン美術館ではマヤ文明展示はメソアメリカ・ギャラリーの一部をなす。ギャラリー中央にメソアメリカ地域の比較的大きな石碑や土器が置かれ、まるで祭祀場のような雰囲気だ。マヤ文明の遺物としては、精巧な儀礼用石斧、写実的な図像を伴う土器、表情豊かな土偶などがガラスケースに収められている。小さな解説パネルではマヤ文明の年代や場所など最低限の情報が述べられるだけで、知識の普及よりも展示物の鑑賞を優先させていることが明らかである。

第2群は、現代のマヤ民族の文化展示を伴うが、マヤ文明の継承者に関する説明を欠いている場合である。この群のミュージアムでは、マヤ文明に加えて、現代のマヤ民族の文化が展示されているが、その提示は断片的であり、彼らとマヤ文明との関係は明示的には語られていない。

表 マヤ文明展示の比較

		現代のマヤ民族の文化展示	
		無	有
マヤ文明の継承者に関する説明の有無	無	<第1群> アメリカ自然史博物館(ニューヨーク市、アメリカ) メトロポリタン美術館(ニューヨーク市、アメリカ) カンクン・マヤ博物館(カンクン市、メキシコ)	<第2群> サンディエゴ人間博物館(サンディエゴ市、アメリカ) マヤ文化博物館(チェトゥマル市、メキシコ) ポポルブフ博物館(グアテマラ市、グアテマラ)
	有	<第3群> デンバー美術館(デンバー市、アメリカ) ロサンゼルス郡美術館(ロサンゼルス市、アメリカ) ミラフローレス博物館(グアテマラ市、グアテマラ)	<第4群> 国立アメリカ先住民族博物館(ワシントンDC、アメリカ) チュレーン大学中米研究所(ニューオリンズ市、アメリカ) 国立人類学博物館(メキシコ市、メキシコ) マヤ世界大博物館(メリダ市、メキシコ) マヤ民族博物館(ジビルチャルトゥン遺跡、メキシコ) イシュテル博物館(グアテマラ市、グアテマラ) カサ・サント・ドミンゴ博物館(アンティグア市、グアテマラ) 国立考古学民族学博物館(グアテマラ市、グアテマラ)

メキシコ東部、カリブ海に面したチェトマル市にあるマヤ文化博物館はその一例である。展示場で印象的なのは、古代マヤ人の世界観を表すセイバの木を模した柱が地下1階から地上2階までを貫通していることだ。展示内容はマヤの世界観の他、当時の経済を支えたカリブ海岸の交易や、暦や文字などのマヤ文化を中心とする。展示場最後のパネルは「衰退」と題され、スペイン人の到来と植民都市の建設について述べている。ところが博物館の中庭には「現代マヤ人」の木造住居が作られている。しかし、「衰退」したマヤ文明と「現代マヤ人」の関係を説明する言葉はどこにも見当たらない。

第3群は、現代の先住民族文化の展示はないが、マヤ文明もしくは古代アメリカ文明の継承者に関する言及がある場合である。この場合、当然、継承者は先住民族以外の人びとということになる。

デンバー美術館とロサンゼルス郡美術館は、世界の美術作品を集めた大規模な美術館である。両館ともマヤ文明を含む古代アメリカ文明の遺物をラテンアメリカ美術のフロアーに展示している。来館者は、土器や石器、金細工などの考古学的遺物を見た後、植民地時代と現代のラテンアメリカ美術やラテン系アメリカ人の作品を鑑賞することになる。こうして先スペイン時代の遺産が、ラテンアメリカ出自の芸術家によって受け継がれていることを学ぶ。

第4群は、現代のマヤ文化を展示し、マヤ文明の継承者についても説明がある場合である。つまりマヤ文明を展示し、その継承者として現代マヤ民族に言及し、その文化を紹介するような展示である。このタイプの展示では、いずれもマヤ民族が自文化に対して取る態度に関して何らかの説明がなされている。

その態度は、マヤ文明の伝統を頑なに維持しようとする保守性と、それとは逆にマヤ文明の伝統を柔軟に変化させようとする革新性に大別できる。前者を強調するのはアメリカの国立アメリカ先住民博物館、チュレーン大学中米研究所のギャラリー、メキシコ国立人類学博物館である。

国立アメリカ先住民博物館では「私たちの宇宙」展示場にグアテマラのケクチ・マヤ民族のコーナーがある。マヤ文明の暦概念と、ケクチの人びとの宇宙観を



2012年に開館したマヤ世界大博物館（2014年10月、メリダ市、メキシコ）。

示す東西南北のシンボリズムが展示され、この展示制作に協力したケクチのコミュニティ・キュレーター達の顔写真が掲げられている。パネルでは、彼らはマヤ文明の担い手の子孫であり、他のマヤ系諸民族とともに古代マヤの宇宙観を共有していると説明されている。一方、チュレーン大学のギャラリーの主題は「マヤ民族の顔：連続性とレジリアンスの輪郭」である。内容はマヤ文明の通史であり、最後の部屋では現代マヤの民族資料が展示されている。

メキシコ国立人類学博物館のマヤ展示場は1階の考古学室と2階の民族学室から成り、その空間構成自体が先スペイン時代から現代までのマヤ民族の文化的連続性を示唆している。注目すべきは2階の導入部のパネルだ。「現代のマヤ系諸民族が西洋文化に参加する程度はさまざまに異なるが、共通しているのは抵抗である」と述べられ、文化の連続性は単なる保守性の現れではなく、「抵抗」という意志によって実現されているという解釈が示されている。

他方、マヤ民族の自文化に対する態度の革新性を強調する展示は、メキシコのメリダ市にあるマヤ世界大博物館にある。同館は「マヤ世界」をテーマとして2012年に開館した比較的新しい博物館である。その特徴は展示場の構成にあり、導入部の地質学展示によりマヤ世界の自然的基盤が示され、マヤ世界の住民としての現代マヤ民族の展示が続く。それ以降は歴史を遡る形で、過去のマヤ民族（植民地時代）、マヤ民族の先祖（先スペイン時代）の展示となる。マヤ文化の動態については、展示場最後のパネルで「偉大なる伝統の後継者であるマヤ民族は、新しい視点を取り込みながら日々そのアイデンティティを再生している」と説明され、マヤ文化は可変的であるがマヤ・アイデンティ



ティは継続していると解釈されている。

グアテマラにある国立考古学民族学博物館、イシュチュエル博物館、カサ・サント・ドミンゴ博物館が描くマヤ民族の自文化に対する態度は両義的である。いずれも、先スペイン時代の文化を保持している人びとの存在と、スペイン文化やグローバリゼーションの影響で新しい文化を生み出した人びとの存在を併記して紹介している。

### マヤ文明は誰の遺産か

マヤ文明の展示にこうした差異が生まれるのはなぜだろうか。直接的には、各ミュージアムが所有する資料、学芸員の専門、展示予算などの違いによるのだろう。しかしここでは根本的な要因として、マヤ文明に対する政治的眼差し、すなわちマヤ文明は誰の遺産なのかという考え方がミュージアムによって異なるからだと考えてみたい。

比較対象のミュージアム展示の中からは少なくとも4つの答えを見つけることができる。第1にマヤ文明は人類共通の遺産だという考え方である。

これは第1群のミュージアムに顕著だ。アメリカ自然史博物館はマヤ文明を新大陸の文化進化の卓越した一段階としてとらえ、メトロポリタン美術館は古代の一美術様式として描く。いずれも人類の創造性という文脈で評価されているといえる。しかし、こうした考え方は、第1群に限定されるものではない。マヤ文明を優れた古代文明として扱い、その知識を公共に提供しようとするすべてのミュージアムに共通していると考えてよいだろう。

第2の答えは、マヤ文明は現代のマヤ民族の遺産であるとする考え方がある。第4群のミュージアムはどれもマヤ民族がマヤ文明の継承者であることを示し、彼らがその文化を継承する態度について言及している。

第3の答えは国家および国民の遺産というものである。第4群に国立のミュージアムが3つ含まれていることに留意したい。メキシコやグアテマラの国立博物館にとってマヤ文明は国民の遺産という位置づけが可能である。アメリカの国立アメリカ先住民博物館の場合は、おそらく、アメリカ大陸のすべての先住民族に対するアメリカ合衆国の主導的な役割を意識しているのだろう。

そして第4に、マヤ文明をミュージアム来館者の中の有力な社会集団の遺産と考えることである。これは第3群のアメリカ合衆国のミュージアムに認められる。デンバーやロサンゼルス系のラテン系住民は、マヤ文明を含む古代アメリカ文明が自身の審美的創造力の源泉

であるという解釈を、誇らしく受け止めるのであるろう。

各ミュージアムはこれらの答えを取捨選択して、展示を組み立てているのだろう。しかし、どれか1つを選択するにしても、複数の答えを組み合わせるにしても、それは明らかに政治的な挑戦である。なぜならば4つの選択肢の間には矛盾があるからだ。たとえばマヤ文明は



メキシコ国立人類学博物館マヤ展示場のサバティスタ民族解放軍の人形 (2014年10月、メキシコ市、メキシコ)。

マヤ民族の遺産だという立場に立てば、その他の立場は容易にポストコロニアル批判の対象となる。マヤ文明の後継者としてマヤ民族を無視する態度は、スペイン人がマヤ民族を征服したという植民地時代に成立した言説を受容または黙認した結果だと考えられるからである。一方、マヤ文明をマヤ民族の占有的な遺産とみなす考えは、いかにもエスノセントリックな発想である。メキシコのマヤ世界大博物館が表明しているように、現代のマヤ民族はさまざまな外来文化を吸収しつつ、そのアイデンティティを更新しているのであれば、他民族がマヤ文明に注目し、その遺産を取り込んでアイデンティティを構築することをマヤ民族が批判することは難しい。

こうした政治的緊張の結果、ミュージアムの展示に曖昧さやある種の情報の隠蔽が生じることもある。たとえば第2群のミュージアムにおいて、現代マヤ民族の文化を展示しつつも、マヤ文明とマヤ民族の関係について踏み込んだ発言をしないことはその現れであろう。サンディエゴ人間博物館に展示されたラカンドンの弓矢は、マヤ文化が20世紀にも存在することを暗示しているが、ラカンドンの人びとをマヤ文明の継承者と明言することはない。その理由は、そう述べた途端に、ラカンドン文化がどのように植民地時代を生き抜いたのか、ラカンドンだけがマヤ文明の後継者なのか、その他のマヤ系先住民族の存在をどう説明するかなど、次々と浮上する疑問に答えなければならなくなるからだろう。また第4群のメキシコ国立人類学博物館では、マヤ文明をマヤ民族の遺産としながらも、同時に国民の遺産としても位置づけることの矛盾が露呈している。マヤ民族の抵抗の証として、1994年にチアパス州で武装蜂起したサパティスタ民族解放軍の写真や人形が展示されているが、すでに見た通り、パネルではマヤ民族は西洋文化に抵抗してきたと説明されている。こうしてサパティスタがメキシコ政府に弓を引いた事実は隠蔽されているのである。

## 今後の課題

「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトは、2018年度まで続く予定である。これからの課題を展望しておきたい。

私が実施中の古代アメリカ文明のミュージアム展示の比較研究は、これまで北米とメソアメリカ地域のミュージアムを対象にしてきた。今後はアンデス地域を中心とする南米のミュージアムでもデータ収集を行いたい。そして、諸事例に学びつつ、みんなくのアメリカ展示場の先スペイン文明展示の改修も考えてみたい。現状ではアステカ文明の石彫のレプリカが展示されているが、それらと展示場の5つのセクションのテーマとの関係はかならずしも明確になっていない。

私が代表を務める研究計画 A04 のレベルでは、さまざまな古代文明の資源化の動きを比較検討していく。本稿ではミュージアム展示を比較する方法論として展示の詩学と政治学の識別を示したが、それを包摂する

上位概念は資源化の「解釈学」と「政治学」である。前者は資源化を試みる者が古代アメリカ文明に見出す意味を解釈することであり、後者は、資源化の動機、とくに政治経済的な関心を問うことである（鈴木2015）。今後はこの枠組みを活用してメンバーの研究の比較をすすめ、「問題解決のための資源の宝庫としての古代文明」という議論を精緻化していきたい。

さらに、A04の研究成果を科研プロジェクト全体にフィードバックする必要がある。その切り口は、「問題解決のための資源の宝庫」とは後世の人間にとっての古代文明の意義であるばかりでなく、文明という営為そのものと考えてみることである。過去に蓄積された経験や知識の中から有用な資源を取り出す作業は植民地時代以降に始まったことではなく、それ以前から行われていたと考えてみたい。そうすると、文明の発展と衰退とは、過去を資源化しようとする試みの強弱の差と考えることができよう。また一旦衰退した文明であっても、時を経て再資源化されることになれば、それは文明の復興と表現できるのではないだろうか。

先史考古学の分野を除けば、文化人類学者が文明という大きな概念を語らなくなって久しいが、本科研プロジェクトによって、新しいアプローチで文明概念を検討することができれば、まさに新学術領域の開拓につながると期待される。そのためにプロジェクト内外のさまざまな分野の専門家と対話を重ねていきたい。

## 【参考文献】

- Lidchi, Henrietta. 1997. The Poetics and the Politics of Exhibiting Other Cultures. In Stuart Hall (ed.) *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*. pp. 151-208. London: Sage Publication.
- Mason, Rhiannon. 2011. Cultural Theory and Museum Studies. In Sharon Macdonald (ed.) *A Companion to Museum Studies*. pp. 17-32. Malden, Mass.: Blackwell Publishing.
- Sturge, Kate. 2007. *Representing Others: Translation, Ethnography and the Museum*. Manchester, UK: St. Jerome Publishing.
- 鈴木 紀 2015 「資源化される古代文明：遺跡の調査と活用に関わるアクター分析、序論」『古代アメリカ』18：95-102。
- 内堀基光編 2007 『資源人類学1 資源と人間』東京：弘文堂。

## すずき もと

国立民族学博物館民族文化研究部准教授。専門はラテンアメリカ文化論、開発人類学。主な著書に『ラテンアメリカ』（共編著 朝倉書店 2007年）、『国際開発と協働：NGOの役割とジェンダーの視点』（共編著 明石書店 2013年）、論文に「オーナーシップ論再考：農村開発における妬みと嫉妬」（関根久雄編『実践と感情：開発人類学の新展開』春風社 2015年）など。